32

森鷗外『小嶋寶素』と小島尚絅『日新録』

多田　伊織
国際日本文化研究センター

小島尚絅『日新録』は，幕末の激動期，安政2～4年にかけて書かれた青年医学生の漢文日記である．考証家・蔵書家として高名な幕府医官小島尚質（宝素）の四男に生まれ，江戸医学館で当代一流の漢方医学を学ぶ17歳の小島尚絅は，激動する歴史の渦に否応なしに巻き込まれる．安政の大地震が襲い，米使ハリスが来日，時代は改革の気運を孕むが，安政4年，兄尚真がわずか29歳で亡くなり，彼は19歳で家を継ぐこととなる．明治維新の11年前のことだ．大正4年，森鷗外は晩年を迎え，史伝・歴史小説に筆を染め，小島尚絅の父の史伝小説『小嶋寶素』執筆の資料を集めていた．その際，富士川游から『日新録』を借覧し，僅かな部分を引用したが，大半を用いなかった．以後，『日新録』はあまり使われないままになっている．鷗外は『小嶋寶素』執筆準備に二年の月日を掛けたにも関わらず，十分な材料を得ることが出来ず，『小嶋寶素』は不本意な作となった．

本発表では，全文翻字を終えた慶應義塾大学富士川文庫所蔵の小島尚絅『日新録』の内容を紹介，江戸医学館および小島家の教育の実態に触れるとともに，安政大地震やハリス来日に代表される当時の世相を読み取り，『日新録』の史料的価値について考察する．

『日新録』は，大部分は具中暦に書き込まれた日記に類似した，簡潔な体裁を取る．二十四節気と大事件を欄外に頭書し，日付・干支・時刻ごとの天候の変化を記し，その日の出来事は小字で双行で付記する．記述が例外的に拡大するのは，安政3年の下総紀行であり，18歳の尚絅は，未熟ながら，紀行文の筆を揮う．

安政2～4年のわずか三年の間に，小島家では，母，大淵家へ嫁いだ姉，そして兄尚真など，重要な人物を相次いで喪う．『日新録』の登場人物は大量にして多彩で，医学館関係者を始めとする当時の医療関係者，姻戚である塙家，一色家等の人々，親族などだ．不幸が続いたこともあり，当時三田寺町にあった檀那寺貞林寺を始め，複数の寺院名が頻出する．

『日新録』で特記されるのは，安政の大地震前後の江戸の有感地震の多さであり，三年間を通じて頻繁に起こる火事である．安政3年の大風雨も簡潔に記されているが，相当な被害だ．こうした極めて不利な条件下で，小島尚真・尚絅兄弟は，豊富な父の蔵書を守り抜いた．

学習面では，医学館の寮生活の記録，漢方医学学習の記録がある他，『抱朴子』の会読や詩作の会等が見られる．また，兄尚真と家内で校勘作業を行ったことも記され，小島家の家学として，考証学が継承されている様子がうかがわれる．

『日新録』は，尚絅が家督を継いだ安政4年の12月晦日をもって終わる．明治維新の後，医学制度は革新，医学館は明治政府に接収され，尚絅は禄を失う．その後，彼は内務省修史局に入り，地理局に職を得る．父宝素の蔵書を守ってきた尚絅は，貴重書を含む大部の宝素堂蔵書の一括売却を考え始め，姉婿である大淵玄道に相談した手紙の写しが，愛知県西尾市岩瀬文庫に残る．そこには，きっぱりと医学を捨てた様子が読み取れる．尚絅逝去の年，清国駐日公使何如璋の随員として来日した楊守敬は，宝素堂の善本のほとんどを購入する．鷗外が捜していた小島宝素の史料の大部分は，宝素堂の書物に序跋等の形で書き込まれており，それらは楊守敬離日に随い中国に渡って行った．鷗外が目睹し得なかったこれら史料は，現在，台湾の故宮博物院・北京の国家図書館等が楊守敬旧蔵書として収蔵する．『日新録』と併せて検討すると，鷗外『小嶋寶素』とはまた別な小島家三代の姿が見えてくるのである．